ジャン・ポール（一七六三―一八二五）はドイツ新人文主義の文学者でかつ教育思想家である。彼は最初神学を修めたが、のち文学に志した。その間、生活のために家庭教師をしたり、小さな学校を経営するなどして熱心に実際教育の経験をつんだ。このことがのちになって教育説をうちたてる上に大いに役立った。彼の幼児教育論は彼の教育的著作「レバーナ、一名教育論」において展開されている。

彼によると、教育の目的は子どもの中に内在する理想人を自由に発展させることにあるという。彼のいう理想人とは身体的、精神的に調和的発展をとげた人のことである。この理想人は子どもの生まれる時、すでにその中に固く秘められている。この硬い殻を除いていくことが教育である。したがって彼は「人間の教育は子どもが生まれ落ちると同時に始めても決して早過ぎはしない」と主張するのである。そして幼児期の教育は理想人の基礎をつくるものであるから、子どもの内にある感覚的、身体的諸力の調和的発達に重点がおかれる。しかもこれは子どもが自分で発達させるものと考えるのである。このために遊戯の持つ意味が重視される。彼は子どものよろこびを快楽と歓喜に分け、前者をさけて後者をあたえるようにせよという。なぜなら快楽は消極的なよろこびであり、歓喜は積極的、創造的なよろこびだからである。遊戯は「人類最初の詩」であり、また、子どものまじめな活動の表現である。この活動がたえず歓喜を創造し、維持していくのである。子どもは遊戯をすることにより、感覚的、身体的な諸能力を発達させ、生命にみちみちた美しい想像力を養い、また他の子どもとの遊戯によって社会的な情操を養うのである。かくてジャン・ポールは、子どもの遊戯と自発性を尊重し、おとなの干渉をさけて、子どもの自由な活動による諸能力の調和的発達こそ幼児期の教育にもっとも大切であるというのである。

園児の超自我領域への両親の影響

名古屋市立保育短期大学　甲斐久生
同　右　成田錠一
名古屋・上名古屋保育園　石田妙子

フロイドによれば超自我とは自我領域から社会的規範、拘束によって作り出された自我理想と無意識的良心より成るものと考えられる。具体的に云えば、罪を犯した場合に罰せられるという恐れ、後悔の恐れである。今幼児の超自我を考えると、幼児は主として両親を理想とし、両親との同一視の結果形成されるということが出来る。本研究はこのような幼児の超自我の形成に与える両親の有無の影響を投影テストを用いて明らかにしようとする。

〔被験者〕I、Q85以上で両親健在の園児及び両親のいない園児、施設児各22名（5～6才）

〔方法〕P、F、T及びC、A、Tを個別的に実施

〔処理手続〕(1)P、F、Tの24の欲求不満場面中、負わされた罪の責任の否認反応(E)―罪は一応認めるが環境に言及して本質的には失敗を認めない反応(I)―更に発達による上昇が予想されるI―＋E―を全反応との比率により両群の幼児の超自我の内容及びその差を明らかにする。(2)C、A、Tの10テスト場面中幼児がその犯した罪に対

して受ける罰の厳しさの表現程度により両群のその内容発達程度の差を明らかにする。

〔結果〕

(1) ※

	A群(両親健在の園児)	B群(両親のいない幼児)	標準
※ E	七・〇%	三・〇%	約七・〇%
I	二・五%	〇・七%	約三・〇%
E+I	九・六%	三・七%	約九・〇%

(I図) ※は5%レベルで有意な差が認められるもの

(2)罪とその罰せられ方を明らかに表現した人数と全体との割合は2図 総反応数と全体との関係は3図の通りである。

(2図) $X^2=10.180$ $P<0.0$

	反応	無反応	計
A群	一九	三	二二
B群	九	一三	二二

(3図)

	総人数	反応総度数
A群	二二	二九
B群	二二	一二

(2図)の反応の反応例を挙げるとA、B群共に悪いこと。横着して縛られた、牢屋に入れられたが多い。しかしこれらの内容まで立ち入った反応は少ない(両群共に)。他の図版についての反応例は横着したから先生に叱られた、暑いからいやだといったらお母さんに叱られたなどである。

幼児の家庭生活における課題

大阪基督教短期大学
土山忠子

一、家庭生活の基盤

家庭の教育は、家庭生活という毎日の活動し続けている生活それ自体の場の中に、意図の有無に拘らず行為として生き働いていくものであることを覚えなければならない。故に、今日の日本の家庭生活の中に確固たる一つの精神的基盤を持たなければ、その教育は砂上の楼閣にすぎないのである。人格の形成せられる場、道徳的訓練のおこなわれる場は家庭であり、その家庭は、神への信仰によって精神的に基礎づけられる時に、児童観、人間観、家庭観を生み出だし、健全な家庭生活が運営されるのである。

二、日本の家庭生活の問題点

(一)家長中心の旧い家の崩壊から、新しい家庭建設の不十分性——新しい家庭建設は、自由と民主々義を標榜したが、キリストへの信仰によって基礎づけられない自由と民主々義は、いたずらな放任、わがままとなり、家庭自体が精神的に中途半端な放浪状態を現出せざるを得なくなった。中心を持たない家庭には、教育の前提となるべき人間観が存在せず、子どもたちをいかなる人間として成長させるべきかの問は、不明瞭な、一貫性のない時代主義的なものとならざるを得ないのではなかろうか。

(二)家庭の宗教生活の混乱——日本の家庭は、信教の自由という美名のもとに、宗教生活は無宗教に近いこと、神観が不明であること、これらは、罪と悪に対する観念の崩壊であり、現代の精神的道徳的混乱を招来していると考えられる。絶対者なる神との関係において、明確な神観の教育があってこそ、時代の変動に左右されない人間観を生じ、真実の人間となることが出来る。家庭の教育的意義を認め、人生における不抜の根底とするならば、これこそ今日の幼児教育における家庭生活上の一大課題であると考えるのである。